



# 教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
© 1993 発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## 聖書解釈と開かれた精神

え、さらに有益な教えを引き出したいと思います。

### 二つの回勅

### 2

まず、この二つの文書の間にある重大な違いに気づきます。それは二つの回勅の論争的な、もつと正確には護教論的な部分についてです。実際、両者ともカトリックの聖書解釈に対する攻撃に答えようとしています。その攻撃のほこ先はそれぞれ違った方向を向いているのです。回勅Pの方はカトリックによる聖書解釈を特に合理(唯理)主義的な科学から守ろうとし、一方、回勅Dは主として聖書解釈への科学の援用に反対する人々や、聖なる書物に對して非科学的な、いわゆる「靈的」な解釈を押しつけようとする一派の攻撃からカトリック聖書解釈を擁護しようとしています。

### 3

どちらの場合も、教導職は重大な反応を示しました。ひたすら防衛にまわるどころか、問題の核心に切り込み、後ほどふれますが、託身(受肉)の秘義に對する教会の信仰を示したのです。科学の成果をかき出した自由解釈の主張に対しては、聖書解釈に科学を応用することを破門をもって禁止、カトリックの学者たちにはテキストの「靈的」な説明に終始するよう命じることもできたはず。ところが回勅Pの取った道は異なりました。禁止どころか、回勅はカトリック聖書学者たちに對し、真の科学的専門知識を身に付け、自らの分野で競争相手をして、自ら強く勧めています。「まず取るべき防衛手段は、科学的批評を進めると共に、東方の古代言語を研究することである。」(EB, P.118) 教会は科学的批評を恐れ

### 4

しかし、今度はいわゆる「神秘主義」解釈(SM)を支持する人々からの攻撃に応じる必要が出てきました。彼らは、教導職が科学的聖書解釈の努力を断罪するよう求めたのです。回勅はどう答えたでしょうか。科学的な研究の努力が信仰を守る上で有益であるには必要と見え、あることを強調するにとどめ、科学的解釈は外的な用途のために用い、靈的解釈は内的な用途のために取って置くという一種の二分主義を採用することもできました。ところが回勅Dで教皇ピオ十二世はこのやり方を故意に避けました。逆に、二つ

1 「教会における聖書解釈」の完成は、回勅「プロヴィデントシムス・デウス」(Providentissimus Deus) (以下、回勅P) 百周年と、回勅「デイヴィノ・アフラテ・スピリトゥ」(Divino afflante Spiritu) (以下、回勅D) 五十周年記念を飾ることになりました。回勅Dも聖書に関する問題を扱っています。一八九三年十一月十八日、学問的な問題に對し非常に關心の深かった教皇レオ十三世は聖書に関する回勅を發布しましたが、その目的は、教皇の言葉によれば「聖書研究を励まし推進する」と共に「時代の必要により合致するよう導く」(聖書便覧 Enchiridion Biblicum 8番 以下EB) ことにありました。五〇年後、教皇ピオ十二世はカトリック聖書解釈学(釈義学)者を励ますため、回勅Dで

新しい指針を示しました。(…) 一九〇二年、教皇レオ十三世は聖書委員会を設立、一九〇九年、ピオ十世は聖書研究所を設立し、一九二〇年、ベネディクト十五世は聖ヒエロニモの没後一五〇〇年を記念して聖書の解釈に関する回勅を公布しました。こうして聖書研究には拍車がかけられていたが、それは第二バチカン公会議で確固たるものとなり、全教会が恩恵をこうむることになりました。「神の啓示に関する教義憲章」はカトリックの聖書解釈学者の仕事について述べ、司牧者と信者に対して、聖書に収められた神の御言葉からさらに一層の糧を得るよう呼びかけています。本日は前述の二つの回勅に注目し、時代や環境の変化を越えて通用するその不滅の指針について考

の自由解釈ですが、これは聖書の原典(テキスト) 批判から地質学まで、文献学、文体批評、宗教史、考古学、その他関連学問に及ぶあらゆる科学的な手段を利用していたのです。他方、回勅Dが世に出たのは、全く異なる論争が始まって間もなくのことでした。主にイタリアで、聖書の科学的研究に反對する動きが持ち上がったのです。匿名のパンフレットが広く配布され、その表現を借りれば「教会と人々の靈魂への恐るべき危機―批判科学による聖なる書物の研究とその解釈、破滅につながる逸脱と過ち」に警告を発していました。

五〇年後、回勅Dの中で教皇ピオ十二世は、回勅Pの与えた指針が実を結んだことを知っていました。「聖書が書かれている言語と東方に関するあらゆることについての知識が深まったおかげで、レオ十三世の時代に聖書の信憑性、古さ、完全性、歴史的価値に對して投げかけられた多くの疑問は…今も氷解し、解決した。」(EB, P.114) 「反対者たちの取り上げた知的な武器を正しく用いた」(S62) カトリック聖書学者たちの仕事の実を結んだのです。これこそ、回勅Dが回勅Pに比べて合理主義解釈の主張をそれほど敵視していない理由です。

の方法が密接につながっていることを示したのです。入念に定義された一語二語の字義的な意味の「神学的」意義を強調する一方で(EB, p.251)、聖書の示す意味として認められるには、霊的な意味によって信憑性が証明されるべきであるとしています。単なる主観的な靈感では不十分です。それが「神」自身が望まれた」意味、靈感を受けた本文に「神が与えた」霊的な意味であることを証明できなければなりません。(EB, p.52-53)

霊的な意味をはっきりさせるのは、聖書解釈学のなすべき仕事なのです。

さて、ここで、それぞれ立ち向かった困難は大きく異なるけれども、二つの回勅はその根底で完全に一致していることがわかります。どちらも人間的なものと神的なこと、科学的な研究と信仰の尊重、書かれた言葉の意味と霊的な意味との間に裂け目を作ることを認めませんでした。こうして二つの回勅は託身(受肉)という秘義とみごとに調和した姿を見せています。

**聖書解釈と託身の秘義**

**5**

靈感を受けた聖書の原文と託身(受肉)の秘義との間の密接な関係は、回勅Dの次の箇所

に述べられておられます。「神のみことばそのものが、罪以外あらゆる点で人間と同じものになったように、神の言葉も人間の言葉として表され、間違っていないという以外、あらゆる点で人間

の言語と同じものになった。」(EB, p.59) 公会議の「神の啓示に関する教義憲章」も同じことをほぼ文字通りに述べました。この記述は意味深い並行関係に光を当てています。

神の言葉を聖書の靈感という賜を通じて書き記すことが、神のみことば託身の第一歩でした。実際、書かれた言葉は選ばれた民と主との間の意志疎通と交わりのための永続的な手段でした。他方、その言葉が預言という一面を持っていたため、「みことばが肉体となつて、私たちのうちに住まわれる」(ヨハネ1・14) 神のご計画の成就を知ることができたのです。人となつたみことばの人間性が天の栄光を受けた後、私たちと共におられたその存在は、書かれた言葉によって再び、永久に証明されることになりました。

靈感を受けた旧約の書に加え、同じく靈感を受けた新約の書が、信じる民と三位一体の神との間の交わりのための確実な手段となつたのです。この手段は、十字架に付けられたイエズスの聖心から流れ出て、教会の秘跡を通じて行き渡る霊的生命の流れから、決して引き離せるものではないことは確かですが、霊的生命を保証する書かれた文書として、それ自身の首尾一貫性をそなえています。

**6**

こうして、二つの回勅はカトリック聖書解釈学者に対して、託身の秘義に堅く一致するよう求めています。託身は特定の歴

史の中で、神と人間とを結びつける秘義です。イエズスの地上での生活は、紀元一世紀始めのユダヤ、ガリヤ地方という時代や場所のみ限定されるものではありません。その出自によって、古代中近東のある小国の歩んできた歴史に、その弱さと偉大さ、神のしもべたちと罪人、変化なく保たれてきた文化と政治上の不運の数々、敗北と勝利、平和と神の国への渴望と共に深く関わっています。キリストの教会は託身を事実として真剣に受けとめるがゆえに、聖書研究における「歴史批判」をたいへん重視しているのです。「神秘的」

解釈を支持する人々が望んだように歴史批判を断罪するどころか、前任者は力強い支持を与えました。「批判学は聖書記者の書き記した文を理解するために非常に有益なので、強く勧める。」(聖書委員会の設立に関する使徒書簡ヴィランツィエ, EB, p.23参照) 同様の熱烈な支持は、同じ言葉(強く)を用いて、本文批評研究について述べる回勅D(EB, p.58参照)にも見受けられます。

**7**

回勅Dは「ご存じの通り、解釈学者たちが聖書に用いら

れている文学類型を研究するよう勧めるのみならず、カトリックの聖書解釈は「こうした研究を認めなければ、深刻な打撃を受けることになる」と知るべきである(EB, p.56)とさえ述べています。この

勧めは、本文の意味するところを可能なかぎり正確かつ明確に、従っ

て当時の歴史・文化的コンテクストの中に位置づけて理解しようという願いから出たものです。神及び託身についての誤った考えのため、一部のキリスト信者は反対のアプローチを試みます。彼らは、神が絶対なる御者であるからには、その言葉の一つひとつも絶対の価値を持ち、人間の言語の持つあらゆる条件にも左右されることはない、と考えがちです。従って、言葉の意味を相対的なものにしてしまふような言語条件の違いなど研究すべきではない、ということになります。しかし、絶対ということについては誤った考えに固執したため錯覚が生じ、聖書の靈感や託身という秘義を事実上否定してしまいました。聖書の神は、触れるもの全てを破壊し、あらゆる特色や微妙な差異を圧殺するような絶対者ではありません。神は創造主で、驚くほど種々さまざまな存在を、創世の書第一章が繰り返して述べるように「それぞれの種類によつて」お造りになりました。さまざま

な特徴を破壊するどころか、神は差異を尊重し、それらをお使いになります。(1コリント12・18、24、28参照) 人間の言葉で自らをお示しになつたとは言え、個々の表現にどれも同じ値打ちを与えただけではなく、意味内容の違いを最大限に利用してすばらしい柔軟性を持たせ、同時にその限界をも認めておられたのです。そのため、解釈学者の使命は難しく、しかも必要不可欠でやりがいのある

**8**

しかし、それだけでは不十分です。首尾一貫した教会の信仰と聖書の靈感を尊重するために、カトリックの聖書解釈学は、研究が聖書テキストの人間の側面に偏らないよう、注意しなければなりません。まず何よりも、聖書解釈学者はキリスト信者が聖書のなかの神の言葉をさらにはっきりと理解し、受け入れ、神と完全に一致した生活を送ることができるよう

に助けなければならぬのです。そのためには解釈学者自身が、聖書の中に神の言葉があることを理解している必要があります。学者の知的活動が生き生きとした霊的生活に支えられていない限り、



# 説教・講話・書簡等の抄訳

その任に耐えることはできないでしょう。霊的生活がなければ、聖書研究は不実なものであり、大切な目標を見失って二次的な課題に限定されてしまい、さらには一種の逃避とさえ化してしまいます。科学的な研究が聖書の人間的側面に限られてしまうなら、神の言葉は人が自分自身を離れて信仰と愛によって生きるよう呼びかけていることを忘れ去る結果になりかねません。

この点について、回勅Pは聖書には特殊な性格があること、従って解釈が必要になることを指摘しています。「聖書を他の書物と同様に考えるべきではない。聖書は聖霊ご自身が書かせられたものであり、内容が極度に重要で、しかも多くの点で神秘かつ難解であるため、それらを理解し、説き明かすためにはつねに同じ聖霊の到来と、その光と恩寵が必要となる。謙遜に祈り、聖なる生活を送るなら、必ずや聖霊を求め見出すことができます。」(EB, n.88) 回勅Dは同じ勧めをさらに短く、聖アウグスチヌスの言葉を借りてこう言っています。「理解するために祈れ！」(EB, n.569)

聖霊の記した言葉に、非の打ち所なく真正な解釈をほどこすためには、まず聖霊の道ぎが必要で、祈ること、もつと祈ること、内的な光を求め、それを従順に受け入れることができるよう、祈りの中で願うこと、そして「愛である」(Iヨハネ4・8、16) 神の言葉

を理解させてくれるものはただ一つ、愛のみであることをわきま、それを願うことがどうして必要です。聖書解釈の仕事に携わる者は、できる限り神の現存を保ち続けねばなりません。

## 9

聖霊への従順は、聖書解釈の正しい方向づけに必要なもう一つの心構えを与え、強めてくれます。それは教会への忠誠です。カトリックの聖書解釈は個人主義者が思い描くような信念には同調しません。信者の共同体を離れては、聖書の言葉の理解を深めるなど不可能なことです。聖書テキストは、個々の研究者が「好奇心を満たしたり、単なる研究の対象とする」(回勅D, EB, n.566) ためのもではありません。それは信者の共同体すなわちキリストの教会に委ねられたものであり、信仰を育て、愛の生活を導きます。この目的を重視するか否かで、解釈は有効にも無効にもなるのです。回勅Pはこの根本的な真理を思い起させた後、この事実を尊重することが、聖書研究を妨げることなく研究の真の発展につながるという見方を示しています。(EB, n.108)

最近の解釈哲学の研究がこの見解を裏付けていること、また信仰上さまざまな立場の解釈学者たちが、たとえば個々の聖書テキストを教会が認めた正典全体の中の一部分として解釈することや、教父たちの聖書解釈の意義を認め、注目することが必要であると強調し、そうした見方で研究を進めて

いることを知り、たいへん勇気づけられます。

実に教会への忠誠は、教会の聖伝の正道にしっかりと立つことを意味します。聖伝は、教導職の指導のもと、聖霊の特別の助けに守られて、聖書正典が民に向かって語られた神の言葉に他ならないことを認め、たえず黙想し、尽きぬ豊かさを発見し続けてきました。第二バチカン公会議もそれを繰り返して断言しています。「聖書解釈に

関するこれらすべてのことは、結局は神のことが保存し、解釈する神の命令と使命とを果す教会の判断の下におかれている。」(神の啓示に関する教義憲章、12番) しかし、回勅Pの主張を繰り返しつつ公会議でも言われているように「このような諸原則に従って聖書の意味を深く理解し、説明するために努力し、教会の判断が熟するようにするのが聖書解釈者の任務である」(回勅P, EB, n.103参照) ことも事実です。

10 このような非常に重大な教会の使命を果すため、解釈学者は神の言葉を述べることから離れてはなりません。そのために、言葉の職務に時間を割き、他の役務者との関係を密にし、司牧的解釈を公けにすることで彼らを助けなければなりません。(回勅D, EB, n.551参照) こうして解釈学者は、聖書の真の意味を見失わせかねない科学的研究の空虚空論の網の目に落ち込まずにすむことでしょう。実に、聖書の意味は信

者一人ひとりを神に結びつけるという目的と切り離して考えることはできないのです。

## 聖書委員会の新文書

## 11

回勅Pは述べています。「広大な研究分野が解釈学者各自のなすべき仕事として開かれている。」(EB, n.109) 五十年後の回勅Dも、同じく希望に満ちた意見を述べています。「たいへん重要なものも含め、まだ多くの点で論議すべきこと、説明すべきことが残っており、カトリック解釈学者たちの知的洞察力と才能がなし得る、またなすべき自由な研究を待っている。」(EB, n.565)

一九四三年に真実であったことは、今日なお真実です。研究の進歩はある問題には解決をもたらしましたが、同時に新しい問題が生れています。解釈学の分野でも他の科学のように、未知の領域を狭めて行くにつれ、探究すべき領域が広くなって行くのです。回勅Dの発布から五年もたないうちに、死海文書の発見が聖書学上の多くの問題に新しい解決の光を投げかけ、他の研究分野にも道を開きました。以来、多くの発見があり、新しい調査や分析の方法が改善されてきました。

12 こうした状況の変化で、問題への新たな検討が必要になりました。教皇庁聖書委員会はこの課題に取り組んできましたが、今日その成果が「教会における聖

書解釈」と題して提示されました。

一読して気がつくのは、随所に見られる開かれた精神です。聖書解釈で今日実際に行われている研究や解釈の方式が吟味され、時には重大な留保条件があることをことうわておかねばなりません、ほとんどの場合、聖書本文の完全な解釈のために有効な要素を認めることができます。

カトリック聖書解釈学には専用の解釈方法というものがなく、しかも哲学的な前提や信仰の真理に反する前提から自由になった歴史批判と共に出発したので、それらを最大限に活用してその中に「みことばの種」を見出す努力をしています。

## 13

この文書でもう一つ特徴的なのは、調和と節度です。聖書解釈において通時性と共時性を調和させるには、二つが互いに補い合う働きを持つていて、二つともテキストの真理を全て引き出し、現代の読者の道理にかなった要望を満たすため必要不可欠であることを認めています。

さらに重要なことは、カトリック聖書解釈が聖書の啓示の人間的側面にのみ注目しているのではないことです。歴史批判の方法の失敗はこれです。また根本主義(ファンダメンタリズム)のように神の側面のみ注目するのでもありません。その両方の側面に光を当て、それらが「神のへりくだり」(神の啓示に関する教義憲章、13番) において一つに結びついてい

# 不変の教え

ることを示しています。

14 最後は、この文書が強調するのは聖書の言葉が全人類に向けて、時間と空間の中で生きて語られているという事実であることにお気づきでしょう。「神のことは人間の話に似たものとなった」(同上)のであれば、誰にでもわかるはずですが、神の言葉は遠く離れた存在ではありません。「その言葉はおまえにずっと近い。おまえがそれを守るように、おまえの口と心にあるものだ。」(第二法の書30・11、14)

これが聖書解釈の目的です。解釈の第一の使命が聖なる文書の真の意味に、時にはいろいろ異なった意味に到達することであるなら、その意味するところを聖書の受け手、すなわちできることなら全ての人々に伝える義務があります。聖書は何世紀にも渡って影響力を及ぼしてきました。聖書解釈はたえずその時代の精神や言語に合う形でなされてきました。聖書言語のこうした直接性、具体的な性格はこのような適応を容易にしてくれましたが、もともと古代文化に起源を持つものだけに、少なからぬ困難も生じました。従って、聖書の思想をつねに現代の言葉に翻訳し、聞く人々に合わせた形で表す必要があるのです。とは言え、この翻訳は原本に忠実なものでなければなりませんし、その時代に流行している解釈や研究方法に合わせてテキストを歪曲することはできません。「人間の言葉で表さ

れて」(神の啓示に関する教義憲章、13番) いても、神の言葉はその輝きの全てをもって提示されるべきです。

今日、聖書は全世界のあらゆる国に普及していますが、それが十分な力を発揮するには、それぞれの民族にふさわしい特質に従って、その文化の中に根を下ろすことが必要です。現代西欧文明の逸脱とはさほど縁のない国々では、世俗化と行き過ぎた非神話化のため神

(日曜日は御父が子供たちとお会いになるための日であり、キリストとその花嫁である教会が、親しく交わる機会です。教皇様は「主日」について説明され、十戒についてのお話を続けられました。)

「神の権利」とも呼ぶべき十戒について考察を続けていますが、今回は第三戒を考えてみましょう。「安息日を守り、それを聖なる日とせよ。」

聖書は、この掟を神の創造のみわざと関連づけています。(脱出20・11参照) 人々を守るべき宗教学上の休日、安息日は、天地を造られた後、神が休まれたことを反映しています。七日目にヤーウェは感嘆と喜びの目でお造りになった世界をごらんになりました。人間を筆頭に全ての被造物が、慈愛あふれる神の眼差しに包まれているのです。全てのものがその暖かみを受けて、母の微笑を喜ぶ幼子のようにでした。

の言葉のもたらす効果にいわば無感覚となった国々よりも、聖書のメッセージは理解されやすいことと思えます。

今日では学者や説教者の側だけでなく、聖書の思想を一般に広める立場の人々にも大きな努力が必要で、たくさんある手段をすべて用いて、聖書のメッセージが持つ普遍の意義を広く知らせ、救いをもたらすその力をあらゆる所で示さねばなりません。「教会にお

聖書に見られる安息日の霊的真理は、キリスト復活の日である日曜日に実現しました。それはこの上なくすばらしい「主の日」、生命が死に打ち勝ち、新しい創造の種が蒔かれた日です。従って、日曜日にはふさわしい

## 日曜日は 祈りと 休息のため

### 十戒シリーズ (3)

祝いが必要です。信者にとつて日曜日は単にお祈りすべき日であるにとどまりません。生涯を通じてどんな日どんな時にも祈るべきだと親しいつき合いのためとつと時間をさくべき日なのです。日曜日は、御父が子供たちとお会い

ける聖書解釈」は紀元二千年を迎える世界に新しい活力を与え、愛徳を奮い立たせてくれるでしょう。

15 (一) 聖書を理解するよう(ルカ24・45) 方、託身された神のみことばイエズス・キリストが皆さんの研究を導いてくださいますように。処女マリアが皆さんの模範となり、神の言葉への惜しみない従順のみならず、言われたこ

にも役立ちます。さらに日曜日は、利他心や友情に基づいた交際や社会関係を築いたり固めたりするきっかけを作り、それらを発展させてくれます。また独りぼっちで苦しんでいる人々に目をむける機会ともなります。神のために時間を作るとは、人々のために時間をさくことと同義なのです。

皆さん、聖なる処女から、落ち着いて考え、神と交わる方法を学べます。沈黙と観想の最上の模範である聖母が、私たちに無感覚にする「物」への執着から私たちを解放し助けとなってくださいますように。「主の日」の美しさを再発見しようとする私

「カトリック教会のカテキズム」が強調するところによれば、日曜日は仕事優先と拜金思想に立ち向かう霊魂の反撃とも呼べるものの中で、日曜日は超自然の世界、永遠の世界への窓を開け、観想する余裕を与えます。これは、この世での経験をさらに深く味わうの

とを受け入れたご自分の方法を教えてくださいますように。マリアは神の言葉と起った出来事を注意深く心にとめて考え続けた(2・19)とルカは伝えてくれています。みことばを迎えることによつて、マリアは弟子たちの模範、母となった(ヨハネ19・27参照)のです。神の言葉を、知的な研究においてのみならず、生活全体で完全に受け入れることをお教えください!

(一九九三年四月)

私たちが神にお捧げすることにより、日々の苦しみは喜びに変わり、平和の息吹が訪れて、私たちは新たにされることでしょう。聖マリア、まことの敬神の模範、私たちのために取り次ぎをお願いします。(二二・二八)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説  
なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円  
送料実費 一年予約九百円 送料六百円 二十部以上の一括購入  
ら送料不要 郵便振替 神戸 3-72393